

子どもの認知的枠組みが成長する社会科授業デザイン

佐藤貴史 (M18EP007)

1. はじめに

昨年度、子どもの認知的枠組みを成長させるための小学校社会科単元デザインとはどのようなものかについて研究を行った。そこで明らかとなった単元育成方略は以下の4点である。

表1 子どもの認知的枠組みを成長させるための小学校社会科単元デザイン

(1)子どもの認知的枠組みのレベル設定、単元目標の設定

学習指導要領の分析、教材研究から子どもの認知的枠組みのレベルを設定し、それらをもとに単元目標を設定する。子どもの認知的枠組みのレベルは、学習内容に応じて、全員が到達する認知的枠組みと発展的な認知的枠組みを設定する。

(2)評価規準、評価方法の設定

(1)をもとに評価規準を設定し、評価対象、評価方法を明確にする。目標と評価規準、評価方法を吟味してつなげるようにする。

(3)問いと知識の整理、単元計画の作成

単元末の評価規準、評価方法を意識して、単元の学習問題と概念的知識を設定し、子どもの認知的枠組みの成長の道筋に合わせて、各時間の問いと具体的知識を設定して図に整理する。それらをもとにして単元指導計画を作成する。

(4)各時間の指導計画の作成

単元末、各時間の評価規準、評価方法を意識しながら、各時間の指導計画を作成する。学習内容に応じて、問いを2段階に設定することも考えられる。まとめをめあてだけに対応させるのではなく、深まった問いにも対応させるようにする。

また、1つの単元ですべての子どもの認知的枠組みが目標通りに成長しないこともあるので、複数の単元や学年をつなげて成長をみていくことも必要である。

詳細は、平成30年度山梨大学教職大学院教育実践研究報告書を参照していただきたい。

昨年度の研究では、上記(1)～(4)によって、子どもの認知的枠組みが成長することを示すことができた。しかし、実際の授業においてどのような手立てが有効なのかについては明らかにすることができなかった。そこで、今年度の研究は、子どもの認知的枠組みを成長させるための授業デザインについて研究を進めてい

くこととする。その手がかりとして、問いと学び合いに着目した。

本研究では、問いと学び合いの先行研究を考察し、それらに基づいて授業実践をする。そして、実際の授業から有効だった手立てが何かを分析、評価し、子どもの認知的枠組みが成長する社会科授業デザインの在り方を追究していく。

2. 子どもの認知的枠組みの育成方略構想

(1)子どもの認知的枠組みとは

池野(2013)、渡部(2019)の先行研究より、子どもの認知的枠組みとは学力の3要素(理解・能力・態度)を包括するものであり、階層性をもち、一人ひとりが対象を理解する認知や認識レベルを高めうるものであるといえる。この認知的枠組みは、教師が知識として子どもに伝達して形式的に記憶させることができるようなものではなく、子ども自身が主体的に事実を直接確かめ友達と議論しながら既存の世界観を壊して再構成することで、自分のものとして心や体の一部となっていくようなものであり、かつ社会の理解だけでなくパフォーマンス全体に影響を与える性質をもっている。

では、なぜ、社会科授業で子どもの認知的枠組みを設定する必要があるのだろうか。理由を2点述べる。

1点目は、社会科の目標を達成するためである。子ども自身が構成(再構成)した社会的事象をとらえる認知的枠組みを育てなければ、社会科の資質・能力として示されている「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」は育たず、新学習指導要領で働かされるものと示されている社会的事象の見方・考え方についても、子どもが使えるものになりにくいであろう。

したがって、社会科の目標を達成するためにも子どもがもっている認知的枠組みを成長させることは不可欠であると考える。

2点目は、単元の学習において、子ども一人ひとりがどのように成長しているのかを明らかにする必要があるからである。小学校社会科の目標は、全体的な概括であったり、観点別目標であったりする。これらの目標について池野は、「基本的に、到達・達成目標を表記することを目指したものであり、その学習の発展・成長、また、一人ひとりの学習の成長を明らかにしようとしていない。」（池野：2013，p. 86）と述べている。私たち教師は、社会科の学習を通して、子どもが何を獲得したかということだけではなく、一人ひとりの子どもが社会科の学習を通して何をどの程度成長させたのかということにも目を向けていく必要があると考える。したがって、子どもの成長の様子を見とり、子どもの学習の改善、授業の改善をしていくために、目標設計の方法として、「子どもの認知的枠組み」を導入していく必要があると考える。

（2）子どもの認知的枠組みが成長するとは

子どもの認知的枠組みが成長するとは、社会科の学習を進める中で、子どもたち一人ひとりが対象を理解する認識レベルを広げ深めていくことである。

子どもの認知的枠組みの成長を、中学年社会科の水道水の単元を例にして述べる。

子どもの認知的枠組みに基づく社会科授業とは、水道水に対するとらえをレベルとして設定し、子どもたちの学習の道筋を作ることができるように設計したものである。具体的には以下に示す。

表2 子どもの認知的枠組みの成長の例

I	日常的なものというとらえ 水道水が単にある(自覚する)という とらえ
II	社会的につくられたものというとらえ 水道水が(人や組織によって)つくら れているというとらえ

III	公共物というとらえ 公共(みんな)のために水がつくられて いるというとらえ
-----	---

【池野(2013)p. 95 をもとに、筆者作成】

I は、学習の出発点であるので、子どもにとって日常的なとらえになっている。II は、学習によって得られた情報や事実を関連付けたり、社会的事象の意味を考えたりすることによって成長したとらえになっている。III は、教材が地域社会や日本の社会に影響を及ぼしていることやその教材にかかわってよりよい社会はどうあるべきかを考えることによって成長したとらえになっている。以上で述べたように、単元の学習において、I からII，III へと子どもの認識レベルが高まっていくことが子どもの認知的枠組みが成長するということである。

（3）子どもの認知的枠組みの育成方略構想

昨年度の研究及び上述(1)(2)から得られた知見をもとにした子どもの認知的枠組みの育成方略の構想は以下になる。

① 子どもの認知的枠組みの設定

子どもの認知的枠組みの成長過程を以下のように設定する。

- (i) 日常的なものというとらえ
- (ii) 社会的につくられたものという
とらえ
- (iii) 公共(物)というとらえ
- (iv) これからも考え続けていくもので
あるというとらえ

② 子どもの認知的枠組みの成長をもとにした問いの設定

上記の(i)～(iv)に合わせた問いを設定する。以下に問いの例を示す。

- (i) ○○は、自分(たち)とどのようなか
わりがあるのだろう
- (ii) ○○は、どのようにつくられてい
るのだろう
- (iii) ○○は、なぜつくられているのだ
ろう
- (iv) ○○は、これからどうあるべきだ
ろう

③ 学び合いを取り入れた授業スタイルの設定

他者と考察したことや選択・判断したことをペアやグループ、学級全体で交流をさせることによって、自分の考えを再構成し、認知的枠組みを成長させることができるようにする。

3. 子どもの認知的枠組みが成長する社会科授業実践(第4学年)

(1)授業実践の概要

- ① 対象 山梨県内公立A小学校
第4学年1学級(24名)
- ② 実習期間 5月～12月

(2)単元「水はどこから」

- ①実践期間 2019年6月～7月

②計画と実践

単元は、第4学年「水はどこから」である。本単元の目標は、以下の通りである。

表3 単元「水はどこから」の目標

【知識及び技能】

- 飲料水の供給の仕組みや経路、飲料水の供給に関係する施設や事業所などの県内外の人々の協力について見学して調べたり、地図帳や図などの資料を読み取ったりしたことを図と文章にまとめることを通して、飲料水を供給する事業は、安全で安定的に進められていることや地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解できるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

- 飲料水の供給のための事業の様子について話し合うことを通して、飲料水を供給する事業と地域の人々の生活に関連付けて、飲料水を供給する事業の役割を考えることができるようにする。
- 飲料水を供給する事業について学習したことを基に、水を大切な資源としてとらえ、自分たちが協力できることなどを考えたり、選択・判断したりすることができるようにする。

【学びに向かう力・人間性等】

- 飲料水を供給する事業の様子について調べたことや考えたことを新聞にまとめる活動を通して、人々の健康と生活環境を支える働きについての関心を高め、自分たちも協力しようとする態度を養うようにする。

本単元で設定した子どもの認知的枠組みは、以下の通りである。

表4 本単元における子どもの認知的枠組みの成長過程

I	日常的なものであるという 水道水があるという観点
II	社会的につくられたものであるという とらえ 水道水は、様々な過程を経て送られているという観点
III	公共物という とらえ 水道水は、地域の人々の健康のために送られているという観点
IV	これからも考え続けていくものである という とらえ 水道水は、わたしたちが健康に生きていくために、これからも考え続けていく必要があるという観点

本単元は、全11時間で行った。各時間の主な問いと子どもの認知的枠組みのレベルは以下の通りである。

表5 単元「水はどこから」の問いの流れ

	時	各時の主な問い
I	1	わたしたちは、水をどのように使っているのだろう
	2	わたしたちが使っている水はどこから来るのか調べ、学習問題をつくろう
	3	学習問題Ⅰ わたしたちが使う水はどこからどのように送られてくるのだろう
II	4	浄水場ではどのようにして水をきれいにしているのだろう
	5	ダムにはどんな働きがあるのだろう
III	6	なぜ、山梨県や上野原市が水を使えるようにしているのだろう
	7	なぜ、山梨県や上野原市が水を使えるようにしているのだろう
	8	使われた水はどこにいくのだろう
IV	9	これまでの学習を振り返り、学習問題について考えよう 学習問題Ⅱ なぜ、わたしたちはいつでもどこでもだれでも安全な水を使えるのだろう
	10	なぜ、水道料金を値上げするのだろう
	11	水道料金の値上げに賛成か、反対か

③レベルⅡからレベルⅢへの向上を意図した授業の様子

表6 第7時の大まかな流れ

【導入】

- 前時までの学習内容(浄水場、ダムの役割)を想起し、現在の水の確保の様子を確認する。
- 副読本で、昔の水の確保の仕方に関する情報を集めて読み取る。
- 昔と現在の水の確保の仕方を比較して、違いを考

える。

◎(昔は個人で水を確保していたのに)なぜ、山梨県や上野原市が水を使えるようにしていたのだろう。

【展開】

○水道事業が公的に行われている理由について話し合い、水道事業の役割を考える。

T1 昔は個人で水を手入れていたのに、なぜ今では、県や市が水を使えるようにしているのでしょうか。

C1 伝染病にかからないようにするためです。

T2 どうして伝染病にかからないようにするためだと思ったのですか。Aさんの考えがわかる人はいますか。

C2 個人でやっているのと、汚い水を飲んでしまったり病気になることもあるから。

T3 別の意見はありますか。

C3 みんなが飲むから上野原市がやっていると思います。

T4 みんなって。

C4 水が手に入りにくい人たち。

C5 山梨県の人たちが暮らしやすいようにするのが県や市の役目。

C6 水は生活に大事なものだから個人ではできない。

T5 他にありますか。

C7 水をきれいにするのに、人の手だけだとできなくて、機械も使う。

T6 機械を使うから何ですか。

C8 高くて個人ではできないから県や市がやっている。

C9 (これまで出てきた意見を)まとめると、いつでも、どこでも、だれでも安心してきれいな水が使えるようにするためだと思います。

C たしかに。(多くの児童の納得の声)

【終結】

○水道事業の役割について、書き出しの続きに記述する。

第7時において、C3やC5、C9の児童は、地域の人々の健康のために県や市が水道事業を行っているのとらえている発言をしていて、レベルⅡからレベルⅢに向上したと評価することができる。また、振り返りシートよりレベルⅡからレベルⅢに向上したと評価できる記述には以下のものが見られた。

- なぜ県や市の人がいっしょにやっているのかを考え、人々が健康に過ごすためだからということがわかった。
- 県や市ではいつでも、どこでも、誰でも安全、安心して使える水にしていることがわかった。
- 県や市は人々(山梨県民)に健康に過ごしてもらうために浄水などを行っている。

- いつでもどこでもだれでも人が住みやすくするのが県や市の役目。

- 伝染病にならないように、県や市で水を使えるようにする(みんなのために)

- 昔は個人で水をつくっている。でも、伝染病などならないために今は、県や市が協力してつくっている。

④レベルⅢからレベルⅣへの向上を意図した授業の様子

表7 第11時の大まかな流れ

【導入】

◎水道料金の値上げに賛成か反対か。

○ネームプレートをミニ黒板に貼り、各自の判断を示す。

【展開】

○判断の理由について話し合い、様々な立場によって判断が違うことを考える。

(賛成)

古くなると、安全、安心な水が飲めなくなる。

(反対)

働けない人や生活が苦しい人にとって値上げは厳しい。

○賛成意見、反対意見がある中で、どうするといいのか話し合い、社会の中の判断には様々な立場があることやメリットやデメリットがあることに目を向けることが必要だと知る。

【終末】

○振り返りを記述する(振り返りシート)。

第11時において、レベルⅢからレベルⅣに向上したと評価できる記述には以下のようなものが見られた。

- 最後の意見を決める時には、自分だけかみんなを思うのが難しかった。
- (水道料金)を値上げするか値上げしないかを決めることは難しいと思った。理由は、いろいろな考え方があるから。
- 水道料金が増えることに悩んだ。それはどちらにとっても、よいこと、悪いことがあるから。

⑤子どもの認知的枠組みの変容

学習後に実施した「水とは何ですか」に対する回答と第11時のプリントの記述を分析すると以下のような結果が得られた。

レベルⅡに成長した児童	2人
レベルⅡ・Ⅲに成長した児童	15人
レベルⅡ・Ⅳに成長した児童	2人
レベルⅡ・Ⅲ・Ⅳに成長した児童	5人

(3)単元「ごみはどこへ」

①実践期間 2019年8月～10月

②計画と実践

単元は、第4学年「ごみはどこへ」である。本単元の目標は、以下の通りである。

表8 単元「ごみはどこへ」の目標

【知識及び技能】	
●廃棄物の処理の仕組みや再利用、県内外の人々の協力について見学・調査したり、地図帳や図などの資料を読み取ったりしたことを図と文章にまとめることを通して、廃棄物を処理する事業は、生活環境の維持と向上に役立っていることを理解できるようにする。	
【思考力、判断力、表現力等】	
●廃棄物の処理のための事業の様子について話し合うことを通して、廃棄物を処理する仕組みや人々の協力関係と地域の良好な生活環境を関連付けて、廃棄物を処理する事業の役割を考えることができるようにする。	
●廃棄物を処理する事業について学習したことを基に、自分たちが協力できることなどを考えたり、地域の良好な生活環境を維持するために大切なことを選択・判断したりすることができるようにする。	
【学びに向かう力・人間性等】	
●廃棄物を処理する事業の様子について調べたことや考えたことを図にまとめる活動を通して、人々の健康と生活環境を支える働きについての関心を高め、自分たちも協力しようとする態度を養うようにする。	

本単元で設定した子どもの認知的枠組みは、以下の通りである。

表9 本単元における子どもの認知的枠組みの成長過程

I	日常的なものというとなえ ごみがあるというとなえ
II	社会的につくられたものというとなえ ごみは、様々な人々が協力して衛生的に処理されたり、再利用されたりしているというとなえ
III	公共物というとなえ ごみは、地域の人々が健康に生活できるように衛生的に処理されているというとなえ
IV	これからも考え続けていくものというとなえ ごみは、わたしたちが健康に生きていくために、これからも考え続けていく必要があるというとなえ

本単元は、全14時間で行った。各時間の主な問いと子どもの認知的枠組みは以下の通りである。

表10 単元「ごみはどこへ」

時	各時の主な問い
---	---------

I	1	わたしたちとごみのかかわりから学習問題をつくろう
	2	学習問題Ⅰ わたしたちが出すごみは、どのように処理されているのだろう
	3	わたしたちが出すごみは、どのように集められているのだろう
II	4	わたしたちが出したごみはどこに運ばれるのだろう
	5	ごみは清掃工場でどのように処理されているのだろう
	6	なぜ、清掃工場では、ごみを燃やしたり細かくしたりしているのだろう
	8	清掃工場で処理したものはどうなるのだろう
	9	これまでの学習を振り返り、学習問題について考えよう
III	10	なぜ、上野原市はお金を使って、ごみを処理しているのだろう
IV	11	学習問題Ⅱ 上野原市のごみ処理の課題は何だろう
	12	上野原市と大崎町のごみの減らし方には、どんな違いや共通点があるのだろう
	13	なぜ、資源をうまく使うと環境にやさしいのだろう
	14	ごみをさらに減らすために大切なことは何だろう

③レベルⅡからレベルⅢへの向上を意図した授業の様子

表11 第10時の大まかな流れ

【導入】	
○前時までの学習内容(清掃工場、最終処分場)を想起し、現在のごみ処理の様子を確認する。	
○T2の話を聞いて、昔のごみ処理の仕方に関する情報を知る。	
○現在のごみ処理の仕方を比較して、多額のお金をかけてごみ処理をしていることを考える。	
◎(昔は個人でごみを処理していたのに)なぜ、上野原市はお金を使ってごみを処理しているのだろう。	
【展開】	
○資料を調べて、ごみの量の変化に関する情報を集めて、ごみの量が増加していることを読み取る。	
○資料を調べて、昭和30年代の上野原に関する情報を集めて、環境衛生が悪かったことを読み取る。	
○ごみ処理事業が公的に行われている理由について話し合い、ごみ処理事業の役割を考える。	
T1	昔は個人でごみを処理していたのに、なぜ今では、上野原市が税金を使ってごみを処理しているのでしょうか。
C1	悪い影響が出ないようにするためです。
T2	悪い影響とは何ですか。
C2	ハエや悪臭で体に影響が出ることです。

- T3 別の意見はありますか。
 C3 自然を汚くしないようにするためです。
 T4 どこからそう思ったの。
 C4 水路にごみがあふれていたり、がけから
 ごみを捨てていたところから。
 T5 どうして、上野原市が自然を汚くしない
 ようにしているの。
 C5 自然が汚いと暮らしにくいから。
 C6 きれいにして、みんなが気持ちよく生活
 できるようにする。

【終結】

- ごみ処理事業の役割について、プリントにまとめる。

※下線は、レベルⅡからレベルⅢに成長したと評価できる発言である。

④レベルⅢからレベルⅣへの向上を意図した授業の様子

表 12 第 14 時の大まかな流れ

【導入】

- ごみをさらに減らすために大切なことは何だろう。

- 各自の考えをプリントに記述する。

【展開】

- ごみをさらに減らすための方法について話し合い、ごみを減らすためには個人と公でできることがあることを考える。

(個人)	(市や地域)
ごみを再利用する。	ごみを減らす呼びかけ
つめかえられるもの	をする。
はつめかえて使う。	3 Rに取り組むとスタ
物を最後まで使う。	ンプなどをもらえる。
マイバッグを持って	市のごみ袋を使うよう
いく。	にする。
	(大崎町のように)多く
	の種類に分別する。

【終末】

- 振り返りを記述する(振り返りシート)。

第 14 時において、レベルⅢからレベルⅣに向上したと評価できる記述には以下のようなものが見られた。

- 自分で何をすればよいかを考えるのが難しかったけど、考えることは大切だと思った。
- 家でも使えるごみがあるのかなと思った。
- ごみを減らすためには、今回学習したことを使えば減ると思います。例えば、リサイクルできる素材でつくられたものを使うなどしていけば、さらにきれいな市になると思います。

⑤子どもの認知的枠組みの変容

ごみのイメージマップと第 14 時のプリントの記述を分析すると以下のような結果が得られた。

レベルⅡ・Ⅲに成長した児童	7 人
レベルⅡ・Ⅳに成長した児童	5 人
レベルⅡ・Ⅲ・Ⅳに成長した児童	12 人

4 2つの実践の成果と課題

2つの実践の成果について、4点述べる。

1点目は、社会的事象に対する子どもの認知的枠組みが、単元の学習を進めるにしたがって広く深くなっているということである。単元

「水はどこから」の学習前と学習後に「水とは何ですか」という同じ質問に回答させた。学習前には「生活に必要なもの」と回答していた児童が学習後には「浄水場の人が苦勞してつくりあげた大切なもの、安心安全なもの、いつでもどこでもだれでも使えるもの」と回答するようになった。同じように学習前には日常的なとらえで回答している児童が学習後には「みんなが使うもの」、「安心して使えるようにしているもの」などとレベルⅢに対応する内容を回答していた。特にレベルⅢへの成長を意図した「(昔は○○なのに)、なぜ～だろう」という問いは、これまでの筆者の実践の問い「なぜ～だろう」と比較すると、児童が公共的なとらえに成長することに効果があつたと考える。

2点目は、前単元までの学習で成長した認知的枠組みを使って、新たな社会的事象をとらえているということである。単元「ごみはどこへ」の振り返りシートに以下の記述がある。

- ・上野原市は他の県や市と協力してごみ処理をしている。水は大月市だったけど、ごみは他の県といっしょにやっている。
- ・水の授業と同じように、上野原市がお金をかけて処理していることがわかった。理由は、きれいな環境にするためである。

これらの記述から、児童はごみに対して、前単元「水はどこから」で成長してきた「社会的につくられたもの、公共物」という認知的枠組みでとらえようとしていることがわかる。

また、12月に実施した単元「上野原用水の開発」において、前単元までの学習で成長した認知的枠組み(公共的なものであるというとらえ方)を使っている姿が見られた。「上野原用水とはどんな用水と言えますか。」についての話し

合いの場面のことである。多くの児童は「命がけでつくった用水」、「当時の上野原の人を助けた用水」、「未来の上野原をつくる用水」などの意見を述べていた。その中で、「出てきた意見をまとめると、みんなにとって大切な用水だと思います。理由は、水の勉強とつながるかもしれないけど、みんなのためにつくったものだからです」というそれまでの意見をまとめる発言があった。「みんなのためにつくられているもの」というとらえは、「水はどこから」や「ごみはどこへ」の単元で成長したものであり、その認知的枠組みで「上野原用水」をとらえていたといえる。このように認知的枠組みが単元を越えてつながるということが児童の姿から明らかとなった。

3点目は、授業での友達とのかかわりにより、認知的枠組みが成長しているということである。以下は単元「ごみはどこへ」の第13時の振り返りシートの記述である。

- ・資源をうまく使うと環境にやさしいことがわかった。このことはAくんから学んだ。
- ・資源をうまく使うことは、Aさんの意見を取り、ごみが環境を汚さずにすみ、環境を破壊しなくてよいから大切だと思った。
- ・Aさんが前の時間で学んだことを使って説明していたけど、わたしもこれからそういう言い方をしてみたい。

これらの記述から、友達の発言をきっかけにごみに対するとらえが処理されるものから資源へと変容しているといえる。また、前の時間とつなげて説明するという学び方についても友達との交流を通して学んでいる姿が見られた。

4点目は、「モノからコト」へと社会的事象をとらえるようになった児童の姿があったということである。単元「ごみはどこへ」の学習後の振り返りシートの「あなたが学習を通して成長したと思うこと」への記述に「ごみを見るとごみのことを考えるようになった。」というものがあつた。「ごみのこととは何か」と記述した児童にさらに詳しく聞いてみると、きれいな環境で生活するためにごみがクリーンセンターや最終処分場で処理されていること、ごみを減らす必要があるということであつた。このよう

にははじめはごみを「モノ」としてとらえていた児童が学習を通して、ごみを「コト」としてとらえられるようになっている。

以上の成果があつた一方で、課題もあつた。課題について、4点述べる。

1点目は、児童一人ひとりの認知的枠組みが成長するように学び合いが起こる環境をつくるということである。学び合いを実現するためには、「子どもたちがゴールを共有して問題解決をしていく過程で、一人ひとりが仮説を持ち、多様な学習成果を統合して考えをまとめ、それらを互いに表現し合い、情報をメンバーで共有しようとするような心理現象がメンバー全員に引き起こされること」(鹿毛：2019)が必要である。より成長を促すために学び合いが起こる環境づくり、本実践では特に情報を学級全体で共有しようとすることがさらに必要であつた。

2点目は、認知的枠組みの評価についてである。子どもの認知的枠組みが成長しているかどうかを見とるために、各時間のプリントの記述、振り返りシートの記述を主に活用した。しかし、プリントや振り返りシートの記述だけだと、書く能力や表現力の有無によって記述に差が出てくることもある。そうすると、子どもの認知的枠組みを適切に見とることが困難になる。したがって、子どもの認知的枠組みの成長をより適切に見とる方法を開発することが必要となる。

3点目は、レベルⅣに関する直接的な記述が2つの単元の「〇〇とは何ですか」やイメージマップの記述からはあまり見られなかったということである。それは、レベルⅢまでの認知的枠組みとレベルⅣの認知的枠組みには、質的に違うものになっていると考えられるからである。具体的には、レベルⅠ～Ⅲは「～がある、～されている」というように社会的事象の事実や理由をとらえることを示したのになっている。一方、レベルⅣは「～する必要がある」というように価値的なことを示したのになっているといえる。したがって、レベルⅣ(価値的なもの)については目標設計、授業設計の段階では射程に入れつつ、認知的枠組みがレベル

IVまで成長したかについては、判断力の評価と関連付けて行おうとよいと考える。

4 点目は、認知的枠組みの成長は複数の単元や年間カリキュラム、学年間のカリキュラムをつないで構想するということである。本研究で実践した2つの単元は、新学習指導要領の内容の「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」に区分されている「人々の健康や生活環境を支える事業」の単元である。同じ内容に区分されていることもあり、認知的枠組みの設定の仕方や問いの流れは同じようなものになっているため、教師も子どもも2つの単元がつなげやすいものになっていた。その結果、「水はどこから」の単元で成長した認知的枠組みを「ごみはどこへ」の単元で使っている姿が見られた。しかし、新学習指導要領で示されている小・中学校社会科における内容の枠組みと対象の「地理的環境と人々の生活」や「歴史と人々の生活」に区分されている内容における認知的枠組みの段階や問いの設定については本研究の2つの実践と違いが出てくると考えられる。また、小学校第3学年と第6学年では認知的枠組みがどのようにつながり、成長していくのかということに関しても本研究では明らかにできなかった。

5 おわりに—社会科授業デザインの要件—

本研究で明らかとなった子どもの認知的枠組みの育成方略を改めて示すと以下のようになる。

①子どもの認知的枠組みの設定

子どもの認知的枠組みの成長過程を以下のように設定する。

- (i) 日常的なものというとらえ
- (ii) 社会的につくられたものであるという
とらえ
- (iii) 公共物というとらえ
- (iv) これからも考え続けていくものである
というとらえ

ただし、(iv)については成長過程として設定するが、評価については判断力と関連付けて行おう。

②子どもの認知的枠組みの成長をもとにし

た問いの設定

上記の(i)～(iv)に合わせた問いを設定する。以下に問いの例を示す。

- (i) ○○は自分(たち)とどのようなかわりがあるのだろう
 - (ii) ○○はどのようにつくられているのだろう
 - (iii) (□□は～なのに)○○はなぜつくられているのだろう
 - (iv) ○○はこれからどうあるべきだろう
- (iii)は、「□□は～なのに」という過去や他地域との比較対象を示すことで、公共物としてとらえやすくなる。

③学び合いを取り入れた授業スタイルの設定

他者と考察したことや選択・判断したことを交流することによって、自分の考えを再構成し、認知的枠組みが成長する。そのような学び合いが起こるようにするためには、教育環境(心理的・環境的条件)を整え、学び合う文化を教室につくるようにする。

引用文献

- 堀哲夫(2013)『教育評価の本質を問う一枚ポートフォリオ教科OPPA』東洋館出版社
- 池野範男(2013)『『小学社会』における『社会的な見方・考え方』の成長』的場正美、池野範男、安野功編著『社会科の新しい使命「小学社会」のめざすもの』pp. 80-103 日本文教出版
- 石井英真(2018)「新教育課程を生かす評価のあり方」『リーダーズ・ライブラリ vol. 8』pp. 26-29 ぎょうせい
- 鹿毛雅治(2019)『授業という営み』教育出版
- 北俊夫(2017)『新社会科討論の授業づくり』学芸みらい社
- 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説社会編』
- 森才三(2015)「社会科授業における『なぜ』発問の実践方略—『問いの対象』と『問いの観点』に注目して—」全国社会科教育学会『社会科研究』第82号 pp. 13-24
- 澤井陽介(2018)『小学校新学習指導要領社会科の授業づくり』明治図書
- 渡部竜也(2019)「池野範男の学力論—向上主義学力論—」『社会形成科社会科論—批判主義の継承と革新—』子どもシティズンシップ教育研究会著 風間書房